

81 誌上発表 お雇い外国人医師 ショイベの素顔 ——「愛するお母様！」へ「あなたの息子ポート」より——

葉山美知子

京都医学史研究会

まずは今年、2017年はショイベ来日140年になる。

(1) 概況：明治元年(1868)、明治維新以来、日本は欧米列強諸国に対し「追いつけ追いこせ」を旗印に国を挙げて近代化の道をひた走った。そこで政府は多数の欧米外国人を雇い入れることになった。特に幕末から明治初期、旧朝廷があった京都は内戦状態にあり、戦死者・負傷者数知れず、日本古来の治療法では埒があかず、諸外国から近代西洋医術をとり入れることになり、ツテを頼って医学・医術及び医療衛生業務が可能な「お雇い外国人医師」を募ったのである。明治5年(1872)～15年(1882)の十年間にヨンケル・マンズフェルト・ショイベの三人が順次招聘され、その任にあたった。

(2) ショイベの招聘：ショイベに先がけて来日したヨンケルは傲岸不遜、マンズフェルトは融通のきかない時代遅れの先生という、さして喜ばしくもない評価を下されているが、ショイベに関しては非常に好印象を与えて帰国した。

以下の考察は、従来の医学者ショイベ像に加えて、より多面的重層的な公私にわたる人間像の構築をめざしたものである。その拠り所は、ショイベが来日した明治10年(1877)から、離日した明治15年(1882)までの4年半にわたり、母の手元に書き送った140年前の往復書簡である(『京都療病院お雇い医師ショイベ滞日書簡から』森本武利著・酒井謙一訳・2011年発行)。

まず100通をこえる手紙の書き出しは全て「愛するお母様！」であり、手紙の書き終わりは次の3通り「あなたの息子ポート」「あなたの忠実な息子ポート」「心から思いを込めてあなたの息子ポート」である。これらの語句がドイツの慣用句であったとしても、母子関係の親密度は濃くて深い。来日時はショイベ24歳から29歳であった。父は当時50代半ば、母と別居状態にあり、城のような大邸宅に実業家の父方の祖父と母、そしてショイベの3人が使用人と暮らしていた。ショイベは明治9年(1876)にライプツィヒ大学を卒業して内科学教室ブンダーリッヒ教授の助手についたが1年後、明治10年(1877)に京都療病院に招聘されて来日したのである。契約の内容は「給与：月額500円(最初の1年は400円)」「渡航費往復：各650円」「住居：官舎提供」「講義と職務時間：1日6時間以内」という厚遇であった。月給500円は大隈重信、大久保利通と同額で、現在、米価で換算すると実に月額700万円の給与である。たしかにショイベの勤務ぶりは誠実で講義も好評(療病院勤務3年目のショイベの講義科目は「生理学」「病理各論」「診断学」)であった、医学の実績も上げたが、京都府の財政負担は大きかった。だが、なぜかこの報酬額を母へ知らせていない。またショイベは着任早々、恋愛をして結婚、女兒が誕生する。相手はドイツ語学校で学んだインテリ女子で父は九条家侍医、日本の鉄道敷設に尽力した谷陽卿、その次女赫也20歳である。ところがまた、この一連の顛末についてもショイベは母に一言一句触れぬままであった。さすがに若い2人の国際結婚は長く続かず赫也は妊娠中に実家に戻り離婚をしていた。とはいえ、そのショイベが赫也の出産2週間後に「うちの出来事をすべてお知らせします、うちの雌犬のグレーテが10匹子犬を生みました」と母の手紙に記すのである。ショイベの赫也と我が子に対する関心が、母犬グレーテとその子犬へのまなざしほどにも感じられない、マザーコンプレックスの気配が濃厚である。その後日談である、ショイベの孫、ひ孫が100年後の1975年に祖父の赴任地京都を訪れた、そこではるか日本に自分たちの祖父と同じ血をわけた親族の存在を知らされ、仰天したという。